

NPO法人 ナルク(NALC)埼玉西

さい さい  
彩 西

—第 240 号—

【発行】NPO(特定非営利活動)法人

ナルク(NALC)埼玉西

【事務局】〒359-1106

所沢市東狭山ヶ丘 1-45-17

田淵頼孝(代表)方

Tel 04-2926-9787

email [tabutuchiyoritaka@gmail.com](mailto:tabutuchiyoritaka@gmail.com)

## 『マスク』百年のある1ページをひも解く

～100年前スペイン風邪、新型コロナウイルスの感染拡大で注目～

かつて、着けている姿が恥ずかしいと拒まれていた「マスク」。コロナ禍の今では着けているのが当たり前になった「マスク」。新型コロナウイルスの感染防止のほか、花粉の防御を目的に使用することが日常だ。中にはスッピンを隠すとか、余計なコミュニケーションを避ける目的でつける人もいるようだ。今や、マスク着用は特別視されない時代にある。

## コロナ禍で注目集めたマスク狂騒曲一買占め、転売横行

マスク着用が当然とされている現象は、2019年末から正月を思い起こせば中国人観光客らしき集団の爆買い光景。目的がマスクの箱買いだ。その折は不思議な光景と映ったが、2020年2月3日に横浜港へ検査帰港したクルーズ船の異様な検査風景から状況は一変した。マスクの需要急拡大を伴う一方、マスクの買い占め、転売が横行するなど暫くの間、マスク狂騒曲状態に、手指の消毒液の確保にも苦勞させられた。そして、マスク関連の出版物も目にすることが多くなった。

## 菊池寛の短編集「マスク」に隠されたエピソード

過日のこと、図書館の棚で菊池寛の短編集『マスク』を見つけた。スペイン風邪が猛威をふるった100年前。菊池寛は恰幅が良くて丈夫そうに見えるが、実は人一倍体が弱かった。そこでうがいやマスクで感染予防を徹底。その様子はコロナ禍の現在とそんなに変わらない。スペイン風邪流行下の実体験をもとに描かれた短編。見かけは頑健に思われているが、実は心臓も肺も、胃腸も弱い。そんな菊池に医者は「流行性感冒にかかったら、助かりっこありません」と言う。だから、文壇の大御所はうがい・マスク・外出せずという感染対策を徹底。新聞には毎日の死者数が報告され、それに一喜一憂したなど、まるで今、コロナ禍の現代生活を描写しているようだ。

しかし後日談が面白い。スペイン風邪終息後の陽気の良い日に黒マスクの青年にすれ違った際、文豪は自身が世話になった黒マスクを見て、イヤな気分になったという。

・・・宜なるかな。

(西武地区 坂田禎三)

